

過去約2年間に発行された書籍の中から時事的で話題性があり内容豊かなものを会員のご要望に応えながら編集部が選択して紹介いたします。

『**戦場ぬ止み 辺野古・高江からの祈り**』

三上智恵 著 | 大月書店 2015、157pp.

本書は、ジャーナリストで映画監督である三上智恵氏による、辺野古新基地建設をめぐる同名のドキュメンタリー映画の撮影日記(ウェブマガジン「マガジン9」で連載中)に基づいています。新基地の建設が計画されているのは、すでに辺野古にある米軍基地キャンプ・シュワブの沿岸部です。キャンプ・シュワブのゲート前には、新基地建設に反対する人びとが立てたテントがあり、そこに昨年11月の沖縄県知事選挙に際して一篇の琉歌(沖縄の伝統的詩歌)が貼り出されました。「戦場ぬ止み」とは、その琉歌の一節です。

今年 ^{くうとし}しむ ^{ちち}月や 戦場ぬとどみ ^{うちな} ^{うむ}沖縄ぬ思い
世界に語ら ^{しげ} ^{かた}

(今年の11月にこそ、戦場にとどめを刺して終わらせよう。沖縄の思いを、広く世界に知らせましょう)

新基地建設の是非を争点とした激しい選挙戦は、本土でも大きく報じられました。現地の人びとはこの選挙に、「沖縄戦以来ずっと消えることがない戦場に、今度こそ止めを!」という思いををかけていたので。以下に、三上監督自身の文章を引用しましょう。

生まれ育った生活の場が戦場になり、愛する人たちを殺され、先祖の土地まで基地に奪われた沖縄。戦後「本土復帰」まで、植民地同然の27年間の辛酸をなめながら、ベトナムへの爆撃基地として戦争の島でありつづけた沖縄。日本に復帰すれば日本国憲法に守られると信じて闘ってきたものの、いまだに土地は戻らず、財産権も平和的生存権も手にすることができない沖縄。さらにオスプレイ100機が飛ぶ計画に向けて、新しい基地の建設を強行されつつある

沖縄。あの戦争から、ずっと「戦場」であり続け、嘆きの声やまぬ沖縄。

現在、日本の総面積のたった0.6%に過ぎない沖縄県に、在日米軍専用施設の73.8%が集中しています。その上、耐用年数200年、オスプレイ100機を搭載する強襲揚陸艦を配備できる軍港を備えた最新鋭の基地を辺野古に建設するというのですから、これは沖縄がほぼ永遠に「基地の島」とされることを意味します。さらに東村高江^{ひがしそん}でも、ヘリパッド(ヘリコプター着陸帯。実際にはオスプレイが使用)の建設が強行されています。

「世界一危険な飛行場」といわれる普天間飛行場は、もちろん閉鎖するべきです。しかし、いま辺野古で建設されようとしているのは単なる「代替施設」ではなく、「拡大強化された新基地」であり、高江のヘリパッドとも連動する一大軍事拠点です。こうした事実について、本土の側の我々ほもっと認識する必要があります。

今年4月の新ガイドラインに、島嶼防衛は自衛隊が一義的な責任を負うと記されている通り、沖縄の米海兵隊は尖閣諸島を守ってなどくれません。では、なぜ政府は「軽く2兆円を超える税金が投入される」(本書より)基地建設を、ジュゴンやアオサンゴが生息する辺野古・大浦湾の貴重な自然環境を破壊してまで強行し続けるのでしょうか? 本書や映画「戦場ぬ止み」、同じく三上監督による「標的の村」など、手がかりはたくさんあります。どうか沖縄のことを知ってください。

評/青柳周一(附属史料館専任教員)

『「戦争」の終わらせ方』

原田敬一 著 | 新日本出版社 2015、206pp.

9月19日午前2時、安全保障関連法が参議院本会議で可決されました。その2日前の9月17日には、衆院に続いて2度目の強行採決が参院特別委で行われましたが、それはとても異様な光景でした。テレビやネット上で映像がたくさん流れたので、ご覧になった方も多いでしょう。速記録さえ残っておらず(つまり採決された証拠がない)、本来ならば無効です。

そして翌日、与党が本会議での安保法の成立を目指した9月18日(野党の抵抗で1日伸び、19日に成立)とは、歴史上何があった日でしょうか？

1931年のこの日、奉天郊外の柳条湖で南満洲鉄道の線路が爆破される「柳条湖事件」が起きました。この事件をきっかけに関東軍が満洲地域を制圧するのですが、後に事件自体が関東軍による謀略であったと暴露されます。さらに1937年の盧溝橋事件を経て、日中全面戦争へと突入することになります。9月18日とは、日本が満洲事変から1945年の敗戦に至る15年戦争の口火を切った日なのです。こんな日にわざわざ「戦争法案」を通そうとした人びとは、日本が行った戦争への認識を全く持ちあわせていないのでしょうか。

過去の戦争を現在とつながる問題として考えることが、今とても重要です。本書では、明治以降の日本が自ら行い、また参戦した戦争—日清戦争、義和団戦争、日露戦争、第一次世界大戦、満洲事変とアジア太平洋戦争、そして朝鮮戦争とヴェトナム戦争がどのように始まり、終わったのかが論じられます(ただし本書にもある通り、朝鮮戦争はまだ終わっていません)。

安倍首相の戦後70年談話にも明らかなように、日本は日清・日露戦争以来の植民地支配と侵略の責任を直視できていません。また本書でも指摘される

通り、第一次世界大戦後にはヴェルサイユ平和条約、1928年の不戦条約(63カ国が参加)などといった戦争回避の国際的努力がありましたが、日本はこの不戦条約を満洲事変によって最初に破った国となりました。

そしてアジア太平洋戦争後、米国に追従する姿勢を強めた日本は自国内に米軍基地を置くことを認め(その負担を過度に集中させられてきたのが沖縄)、朝鮮戦争・ヴェトナム戦争にも米国の兵站軍事拠点として、実際には加担しながら「対岸の火事」を決め込みました。本書では、未だに戦争を正当なかたちで終わらせることができず、紛争を未然に解決して平和を創り出すための大局的な思考も獲得できなかった日本の姿が浮き彫りにされています。

それでも、日清戦争から50年にわたって戦争と侵略に明け暮れた日本が、「1945年以降70年間、自らの意思では戦争を起さず、外国の人々を殺すという直接的暴力を振るうことがなかった」こと、これは「世界史の中でも特筆されるべき快挙」でした(本書より)。しかし今、これまで戦後日本の平和主義を支えてきた憲法9条が、安保法成立によって形骸化させられています。こんな状況にあるからこそ、本書を手がかりとして日本の戦争、そして平和の意味をしっかり考えたいと思います。

評／青柳周一(附属史料館専任教員)

『弱さの思想 たそがれを抱きしめる』

高橋源一郎、辻信一 著 | 大月書店 2014、207pp.

平均年齢60代後半の住民が助け合いながら暮らしている、反原発運動で有名な祝島。駅前の精神科病院を中心にカフェやアトリエや商店街が集まってできたオランダの町エルメロー。「弱さ」や「弱者」を中心に据えたいくつものコミュニティが紹介される。

経済成長に絶対的な価値を置くこの社会の行く末を憂慮する二人の著者は、効率を最優先とする立場からは無駄や敗北ととらえられがちな「弱さ」の中に、しなやかさ、多様性、複雑さなどの、真の意味での強さにつながる価値を見出すことを通して、これからの社会のありかたを探ろうとする。

お伽話にすぎないとか、経済がしっかりしていないと元も子もないとかいう批判もありそうな気がするが、強者も弱者もなく一人一人が居場所を見つけて生き生きと暮らしてゆける（一億総活躍という意味では断じてなく）社会に向けて、一筋の光が見えたような気にさせてくれる本です。

「敗北と無駄を抱きしめる」「多様性をとりもどす」「経済という神話から抜けだす」「非経済的な分野に活路がある」などの提言は、社会のありかたのみでなく、個人レベルでの生き方についても真剣に考えてみる価値があると思います。

評／『彦根論叢』編集委員／谷上亜紀

